一人のモブの些細な現実

薄明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一人のモブの些細な現実

【Ｎコード】
Ｎ４８３０Ｔ

【作者名】
薄明

【あらすじ】
皆さん、私はモブだ。少女Ａとか訳されるアレ。
だから、どこかの代表候補生でもないし、専用機持ちでもない。
…このまま、モブとして歩んで行くつもりだったのに。
そんな願いは、とっくに吹き飛んだ。唯一の例外のせいで。
これは、そんな一人のモブキャラ（？）の視点から書いた、とある物語である。
注）これは熱血系じゃないよ。

序の零：第零話（改）（前書き）

息抜きになんか書いてしまった。

…バトンの影響じゃないよ、多分。

序の零：第零話（改）

皆さん、私はモブだ。どこかの代表候補生でもないし、専用機持ちでもない。
…このまま、モブとして歩んで行くつもりだったのに。
そんな願いは、とっくに吹き飛んだ。唯一（イレギュラー）の例外のせいで。

―Ｅｐｉｓｏｄｅ　０
開始の分岐（ダイバージェンス）―

中学3年、3学期、3月。イレギュラー出現まで、約2ヵ月半。
自分の人生は自分が主人公なんて言うけれど、所詮私はモブだ。
可愛い、綺麗と言われる事はあっても、こんなレベルの人なら、幾らでもいる。
容姿が飛び抜けて凄い訳ではないし、評価するなら、
”普通の学校なら魅力的だが、美少女ばかりの学校では平均的”
だろう。
女子たちは受験の話で盛り上がっていた。無論、自分も女子なのだが。
「ねえねえ、何処を受験するの？」
「私は…藍越学園、かな？」
「へー。でも、名前がＩＳ学園と似てるよね」

「うん、学費は安いし就職も融通が利く良い学校なのにね」

「「「本当だよねーー」」」

そんな話を聞き流しつつ私は電子書籍のページをめくる。
最近は、女尊男卑の風潮が浸透しつつあって、女子と成績優秀な男子のみが電子書籍の
持参を許されている。

…この学校は、男女共学だ。
だから、女子が男子を使うことなんて日常茶飯事だ。

私は、そんな事をするのは嫌だ。

男には身体の強さがあり、女には精神の強さがある。
何故、どちらも平等という事にせず、軍事的に優位に立つ側の性別が強い、
ということにされねばいけないのか。

昔からそうだ。昔は男が尊いとされてきたが、女性は何故尊くない？
…死ぬかもしれない、夫を待っていたかもしれないというのに？
…死ぬかもしれない、子を待っていたかもしれないというのに？
…死ぬかもしれない、兄を待っていたかもしれないというのに？
…死ぬかもしれない、弟を待っていたかもしれないというのに？

その屈しない精神は、賞賛に値するのに？

今は、女が尊いとされてきたが、男性は何故尊くない？

…縁の下の力持ちではなかったのか？
…結ばれた友情があるのではないか？
…正々堂々としているのではないか？

暑苦しいのは嫌だが、その屈しない肉体は、賞賛に値するのに？

なにより、男が女性に強要する事なんて無かったのに、女性がその逆をしていいのか？

「…は、何処受験するの？」

む。何時の間にか私にも話が回っていたようだ。

「そうね…ＩＳ学園かな」

「え…あそこ、倍率むちゃくちゃ高いよ！？」

「そこに、筆記と実技でどれだけ挑戦できるか試してみるのよ」

「「「「うわぁ…」」」」

そう、私は、自ら言うのも恥ずかしいが、学園でも随一の努力家と称されていた。

『才能の天才』ではなく、『努力の天才』と。

塵も積もれば山となる。

星火燎原（せいかりょうげん）。

私は似通った意味と考えている。

自らの側で言うのであれば、塵も積もれば山となる。
油断している相手の側から言うと、星火燎原。

つまり、どんな努力も才能には及ばないのではなく、努力の質が大事と、私は考えている。
質を塵の大きさとたとえると、質(中身が濃い)が良い努力は塵が大きく、質(中身が無い)が悪い努力は塵が小さいのではないか。

そういう考えがあるから、私は努力を続ける。
才能を越せるんじゃないか、という愚かな期待と、諦めの悪さという、哀れな願望を抱(いだ)いて。

それが、私の運のつきだったのかもしれない。
普通にＩＳ学園に入学して、普通に2学年になったら整備科に入って、
普通に卒業して、普通にどこかの技術研究所、つまりは企業のＩＳ開発者になれればよかったのに。

◇

ＩＳ学園には、無事合格した。
筆記試験２０位、実技試験２５位、総合２３位。
思ったより良かったその成績に、私は心の中で内心、ガッツポーズをとっていた。
しかも、成績は良いほうのモブのレベルなので問題なし。

切実な願いが、叶えられる可能性が現れたから。

しかし、その後がいけなかった。

◆

先程の切実な願いが、叶わぬかのように。

世界は、如何してこんなに、非情なのだろうか。

世界は、如何してこんなに、残酷なんだろうか。

「世界で始めて、ＩＳを使用できる男が現れました！」

それは、入学前日の話。

世界で始めてＩＳを動かした男が現れる。

彼は、女尊男卑を平等にまで持ってゆける可能性のある唯一の人物。

私は、その異分子（イレギュラー）とは係わりません様に、

しかし平等への可能性を胸に、眠りについた。

序の零：第零話（改）（後書き）

はてさて…

何で書いてしまったのだろうか？

うーん…バトンの影響、恐るべし。

甲の壱：第一話（改）（前書き）

ＩＳって、転入生が多いけど、元８番の子って、何処言ったのだろうか。

甲の壱：第一話（改）

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲ（ショートホームルーム）始めますよー」

極端に伸びているわけではないが、間延びした声。

確か…副担任の山田真耶だっけか。

自分を除くほぼの女子、いや、自分も含むすべての女子は、そんな事はどうでも良いのだろう。

一番前の中央の席。

そこに、視線は集中していた。

視線に物理的影響力があれば、間違いなく視線は死線に変化している。

織斑（おりむら）一夏（いちか）。

世界初の男性ＩＳ操縦者。

もっとも幸運（ラッキー）にして、もっとも不幸（アンラッキー）な人物。

幸運と言うのであれば、女子達に囲まれる、『それなんてエロゲ？』的なハーレム。

不幸と言うのであれば、女子達の陰湿な苛めを受ける、孤立状態。

もっとも、後者は無いだろうが。

苗字から推測する限りでは、織斑千冬の親族。弟とか。
こう言うポジの時はラノベやゲームではブラコンとシスコン、そして好意に気づかないと相場が決まっている。

…本当だったら怖いが。

さらに、このクラスには凄い人たちが大集合している。
前述の織斑一夏に加え、ＩＳ開発者、世界の均衡を崩した篠ノ之束（しのののたばね）の妹、篠ノ之箒（しのののほうき）。
そして、入学主席のセシリア・オルコット。

これなら目立たなくてすむだろう。

ちなみに、私の席は教卓から見てセシリア・オルコットの前の前、織斑一夏の斜め右後ろの後ろ、そして篠ノ之箒の斜め左後ろの後ろと言う、
その凄い人たちの丁度ど真ん中。

３人の間で何か起きると巻き添えになりそうで怖い。

とまあ、それはおいといて。

後は、４組に生徒会長にして、国家代表の更識楯無（さらしきたてなし）の妹、更識簪（さらしきかんざし）がいる。
…妹ポジが多いな。まあ、私も一応そうだけれども。

そんなことを考えていると、自己紹介が私の番になったようだ。

「どうでも良いでしょうが始めまして。影島舞（かげしま まい）と申します。
趣味は読書。以上です」

―Ｅｐｉｓｏｄｅ　０１
影の島で、舞い踊るもの―

私は、平凡な人間だ。姉を除けば。

私の姉の影島遥（はるか）は、頭脳明晰にして、八方美人。
文字通り、私には遥かに遠い、雲の上のような存在。
尤（もっと）も、職業は産業スパイと言う、なんかよくわからない人。

だが、そんな姉に対して両親は、姉がどんな仕事をしているのか知らない。
で、何故私が知ったかというと、連絡する現場を目撃してしまったから。

ある意味、不運だ。、私は。
特に目立つ頭脳も無く。
特に目立つ体力も無く。
ただ、目立つ物といえば、”努力”だろうか。

あるところまで必死に向かい、気づけば、振り出しに戻る。
あるところまで必死に向かい、気づけば、振り出しに戻る。

そんな私を見て、両親は、こう嘆いた。

”期待外れ”

私に、何を期待したって言うんだ。

私に、期待なんかしても、何も得られないのに。

そして、去年の、夏休み。

何故かは知らないが、突然、両親の目は、私に、無駄にした時間を返してくれ、と訴えていた。

今更…

私が何をしたって言うんだ！

私が、生きている価値なんて無い塵とでも言いたいのか！

私の思いは、とめどなく両親にそそぐ。

優秀だった姉に比べれば、期待外れ。

伯父や伯母まで急にそんな事を口に出してくるようになった。

黙れ…

黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れダマレダマレダマレダマレダマレダマレダマレ！！！

母や父の事と重なり、感情が爆発する。

裏方で活躍する姉なら兎も角、アネトハチガウワタシニキタイスルナァ！

それから、両親とは疎遠になってしまった。

・・・・・・・・・・

あるところまで必死に向かい、気づけば、振り出しに戻る。
あるところまで必死に向かい、気づけば、振り出しに戻る。

こんな事の繰り返しで、成績は上昇することも下降線を辿る事も無く、上の中どまり。
何度も何度も復習したりしても、一部のみが覚えられない。

どうして私はこんな人間なのだろうか。

ちなみに姉は裏方で活躍するのみで、ＩＳは使わないため、表舞台に出てこない。
だから、ここ、ＩＳ学園では、一般人でいられる…筈。

この事実も、誰も知らない筈。

だから、私は、ただの

”少女A”

に過ぎない。

もし良くても、出番の多い攻略不能キャラ。

だから、また別の分野で、努力しようと思った。

思ったけれども、技能は突然上昇をやめ、下降もしない。

そして、努力の反動からか…某巨大掲示板と、ゲームにはまってしまった。

こればかりは、どうしようもなかったな…

パンッ!!と、小気味のいい音が脳内に響き渡り、ふっと我に返る。

「へ？」

何故叩かれたかと言うと、恐らく物思いに耽(ぼーっとして)っていたからであろう。

思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

「へ、とは何だ。お前、もう一度喰らいたいか？」

…不味い。

そうだ。1組の担任は織斑千冬だった。

織斑千冬。

第1回モンド・グロッソのヴァルキリー。
第2回目の大会では謎の棄権。

恐らく、弟絡み、又は友人絡みで何かあったのではないか。

それは、誘拐かも知れない。
それは、殺人予告かも知れない。
それは…

いくつもあるが、織斑千冬は、知り合いを見捨てるほど薄情者ではないはず。

「あ、出席簿の一撃なんかは、お断りさせていただきます」

「それだけ言えるのであれば、もう一発、食らってみるか？」

パアン！と小気味のいい音が再び鳴り響いた。

◇

「なあ、アレ喰らって大丈夫か？」

…アレほど関わってはいけないと思っていたのに。
彼の方から関わってきてしまった。

「ああ…大丈夫です。それより、彼女と会話してあげたらどうなんです？
さっきのやり取りからして、知り合いのようですし…」

なるべく遠ざけようと篠ノ之箒を利用する。
実際、話したいがきっかけを掴めない様だったし。

「え？　…本当だ。ありがとうな！」

そういって、織斑一夏は去っていった。

もう、こちらに関わることが無いようにしたい。
しかし、関わる可能性がある。

どうすればいい？

答えは簡単だ。

”諦める”事だ。

努力は必要だが、過剰になるとそれはまた大変だから。

と言うわけで、私は彼に関わらないことを諦めた。

甲の壱：第一話（改）（後書き）

誤字、脱字、感想、意見などがあったらお知らせください。

見て頂き、ありがとうございました。

キャラ濃いけど、気にしないでね。

甲の壱：第二話（前書き）

モブ？サブキャラ？な立ち位置を維持しているオリ主。

…この作品、どうしたかったんだろう。

甲の壱：第二話

「――――――であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、
枠内を逸脱したＩＳ運用をした場合は、刑法で罰せられ――――――」

正直、眠い。
知っている内容だし、復習程度にしかならないので、非常に眠たい。

しかし、織斑一夏は違うようだ。
なぜか教科書をパラパラとめくったりしたり、
隣の女子のノートを覗き込んだりしているが、恐らく、内容についていけていないのだろう。

姉による情報の遮断か。
或いは単なる馬鹿か。
或いは単なる不良か。
丸暗記してあって暇か。

いろいろ浮かんでくるが、まず３つ目は無いだろう。

もし３つ目が事実だったとしたら、あんな接し方はする筈は無かろう。

もし不良だったら、ざまあみろ、とでも思っているのかもしれないが、織斑一夏と篠ノ之箒の行動を見ている限り、それは無い。

…あの様子だと、どこぞのテンプレハーレムじゃないのか？

そんな不安に煽られつつ、被害者が出ないようにと念じる。
そして、私にまで被害が及ばないようにとも念じた。

「織斑君、何か、わからないところはありますか？」

念じ終わった途端、山田先生の声がかかる。
恐らくは、先ほどの織斑一夏の挙動不審にでも気づいたのだろうか。

「わからないところがあったら訊いて下さいね。なにせ、私は先生ですから」

私は、の所を強調する先生。
そんなに、子供として見られるのが嫌なのだろうか。
まあ、大抵がそうだとは思うが。
しかし、それも個性の１つとして見ると、また違うようにも見えてくる。

要は、短所として見るか、長所として見るかである。

結論として、私は長所と受け取った方がいいと思う。
だって、巨乳＋眼鏡＋低身長って、ある意味、超が５個ぐらい付くキラーカードだと思う。

「教師の容姿を考察して授業に参加しないような奴は、何処のどいつだろうなあ、影島！」

バシィン！

――――――――――――

あれから、織斑一夏が、（内容が）殆ど全部わからない、（資料を）古い電話帳と間違え捨てた、
それを再発行、1週間で覚えることになったとか、自分でここにいるのを望んでいないとか。

正直、鬱だ。
もっと噛み砕いて言えば、五月病。

この環境に慣れろといっても、無理がある。
共学だったが、高校ではずっと実質女子高状態、そのまま平凡に…
とはいかなかった為だ。

織斑一夏は、例外だ。
そのイレギュラーと同学年、同クラスというのは、正直、大変だ。

しかし、良かったのかもとも思っている。

どう書いてもイレギュラーと読めるのなら、私は、こう読むだろう。

唯一(イレギュラー)の期待、と。

…中2病乙とかは言わないで欲しい。

と言う訳だが、今は期待より例外という印象の割合が非常に、非常に高いため、
平穏よ、さらば…で五月病へとたどり着くわけだ。

正直、私はあんな立場に立ちたくは無い。
もしＩＳ、つまりはこの世界がラノベだったとしたら、いや、そうで無くても、
テンプレハーレムというのは目に見えている。

まずは1人目、篠ノ之箒。
そして2人目、セシリア、オルコット、と言った具合だろうか。
その内、専用機持ち（1人例外を）すべてを落としそうで怖い。

もしもイレギュラーが、1人だけを選んだら、馬に蹴られてそのまま死亡とか、
夜道を歩いていると後ろから包丁が貫通して死亡等々、不穏な事しか浮かんでこない。
篠ノ之箒と専用機持ちは、芯が強い筈だ。
決して折れてはいけない心。

決して無駄にはできない機会(チャンス)。

信念と、執念。
意地と、悪足掻き。
誇りと、自信。

どれもが複雑に絡み合い、他の要素も取り入れることにより、1つの芯が生まれる。
そしてその芯は、時には崩壊し、時にはより強い芯となる。

そしてその芯が、1人1人の人格の基になるのだと考える。

彼女らは、それがある。
私には無いような、それが。

当の昔にその芯(自己)が崩壊してしまったような感覚に襲われる、私には。

他の人にはそんな私みたいにならないで欲しい。そう思う。

…おっと、もうそろそろ2時間目が始まる。
しかし、何故か周りが騒がしい。
近くの、えーっと・・・・・・・・・鷹月さん?に聞くと、織斑一夏とセシリア・オルコットが何か言い合いをしていたらしい。
正確には、片方が一方的に喋っている様に見えたとか見えないとか。

――――――――――――

「待ってください！納得がいきませんわ！」

時は過ぎ、２時間目。

突然、織斑先生がクラス代表者について説明しだし、挙句の果てに代表を決めるとか決めないとか。

私は平穏なまま過ごしたいから電子書籍での読書。

どうせ私は選ばれないし。

織斑一夏がパンダ状態でそのまま決定、だろう…恐らくは。

だが、別の可能性もある。

そこで私に来る、と言うのは嫌なのだ。

だから、極力目立たないようにしなければならない。

注目されないように。

怪奇の目で見られないように。

日陰者である私は、目立つのは苦手だ。

だから、自ら、ゲームで言う『少女（モブ）Ａ』を目指した。

「…なるべき、そしてそれは私ですわ！」

随分と自信家だこと。

私だったら、あの台詞は、一生言うことは無いだろう。

と言うか、言うのは正直恥ずかしい。

そんなことが言えるからこそ、土台(根元)、そして芯がしっかりしている
んだろうなとも思える。

そこに痺れる！憧れるぅ！

…とまでは行かないが、少しうらやましい。

自分に無いものは、こぞって皆求めたがる。
自分に有るものは、皆不要、と思っている。

勿論、私もその中に入る。入らない者は、悟りでも開いた僧だけか。

自分に無いものを求めたって、結果は決まっている。
自分に有るものを捨てたって、消失感が残るだけ。

なのに、なのに、如何して人間はこうも愚かで、
歪(いびつ)んでいて、不均衡で、
孤独で、稚拙なのだろうか。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさないといけない事自体、
私にとっては――――――」

「イギリスだって大した自慢無いだろ。世界一美味しくない料理で
何年覇者だよ」

流石に織斑一夏も切れたようだ。

だが、それは普通だろう。
愛国心のある人間ならば、自国を貶されて怒るのは普通だ。

しかし、今の織斑一夏の反撃は、逆効果…なのか？
正直、ハーレムが増えるようにする伏線にしか見えない。

そのまま決闘、織斑一夏が勝ち、セシリア・オルコットが惚れるとか。

…まさかね。

そんなテンプレにはならないでくれよ、と思った瞬間、丁度言葉が脳内に入ってくる。

クリアに再生されたその音声は、まさに…

――――――――――――――セシリア・オルコットから、織斑一夏への、決闘の、申し込みだった。

甲の壱：第二話（後書き）

誤字、脱字、修正、描写を増やしたほうが良い場所等ありましたら、感想欄にお願いいたします。

…鬱展開って、皆さん好きですか？
それと、設定書いたほうがよろしいですか？

甲の壱：第三話（前書き）

一話まで改稿。

…大きく（？）設定が変わりましたので、見てくださいな。

変更点

順位が総合２３位にまで下がったよ！

分家じゃ無くて一般の家だよ！

以上、簡潔な説明終わり。

甲の壱：第三話

わたしは、時々思う。

”いつも、起こって欲しくないことが起こるな”と。

別に、それだから何かあると言う訳ではないが、

こうも起こって欲しくは無いことが起こると薄気味悪い。

別に、神や仏などの”高次存在”なんかはいないと思っている。

だが、それの趣（おもむき）なのではないかとも、時々思う。

いや、思わされてしまう。

それは、仕組まれた故意か、大規模な偶然か――――――

甲の壱：第三話

衝突まで、あと一週間――――

目が覚める。

今は、火曜日。つまりはあれから一日後だ。

現状は、織斑一夏ｖｓセシリア・オルコットとか。
まあその内、本当にテンプレハーレム物だったら取り込まれそうだけど。

おぞましい。反吐（へど）が出る。

そんな物はラノベとかの内で充分。
ラノベではハーレムエンドはあっても、個別エンドは無い。
つまりは、手詰まりでしょうがなくそのルートを選んだ、ということだ。

…事実は小説より奇なり。

そう言うから、現実では、そんな物は出来るだろうが、
その内ハーレム内部での殺人が起き、ハーレムの主が逮捕、という展開もありえなくは無いだろう。

そんな事にさせない為には、早く一人に決めさせないといけないが、
私には無理だろう。

と言う訳で、先に祈っておこう。

”死なないように頑張ってください”

…丁度その頃、織斑一夏はくしゃみをしていたらしい。

◇

２時限目。

今日は、通常の授業だが、部活動の見学とやらもあるらしい。
４月末日までが入部期間となり、それ以降は転部扱いになるらしい。
なお、見学しなくても入部は可能らしい。
”らしい”なのは、そう説明している人がまあ、なんと言うか…

単刀直入に言うと、山田先生である。
何故か、というよりは必然的にドジッ子属性が付くと言うある意味すごい先生。
正直、凄いと思う。
ギャップ萌えの人も食いつきそうな気がする。

「…お…」

お？

「…お……いて…るの…影…」

おいてるの影？
意味不明な単語が頭の中に入って行く。

それを拒絶することも無く、聞いていると、徐々に何を言っているのかわかってきた。

「…おい、聞いているのか…影島」

私は、授業中に考え事に移っていたらしい。
いつもそうだ。
気が付けば、何かを考え始める。
どうしてなのかはわからない。
しかし、体が、脳が、勝手に考え出す。

だが、私自身もそれは別にいいと思っている。
もしかしたら、と言う期待があるからかもしれない。

もしかしたら、何か閃くのでは無いか、と。

しかし、現実はそう甘くは無い。
だが、期待してしまうのは、私の心の甘い部分が含まれているのかもしれない。

…そんなこと期待しても、無駄なのに。
無駄ではないだろうが、努力しても上限が決まってる私は、意味がないようにも思える。

だからこそ、かも知れないが。

自分の上限が上がる様、何か思いつこうとするのかも知れない。

――――――――――

私は、ずっとぼーっとしていた気がする。
何時(いつ)からだろうか？

気になって時計を探し、現在時刻を確認する。

・・・・・・・・・・はい？

気が付けば、６時限目が終了している時刻だった。

「聞いていますの！？」

鬱陶しい。

訳もわからないのに怒りの矛先を自分に向けられると恐らく、誰もがそうなるだろう。
特にキィキィ喚いているように聞こえる場合。

何故かと言われると、恐らく昨日の事での怒りが変な方向に再燃したのだろう。
理由は、無視とかそんなものだろう。

くだらない。

”私は貴方より地位が上だけど親切に接してやる”とかは正直、馬鹿げてる。
だから私は、こう言った。

「正直、うんざりです。貴方の自慢話も聞き飽きました。さっさと立ち去ってください」

甲の壱：第三話（後書き）

誤字、脱字、描写増加等の修正点がありましたら、感想欄にお願いいたします。

甲の壱：第四話（前書き）

時間の都合で、（小説が）ショートとなる毎日。

期末の範囲が配られてしまった…

甲の壱：第四話

「せっかくわたくしが話していると言うのに、なんて事をおっしゃるんですの！？」

「……え、うるさ過ぎて迷惑な事を言ってあげただけです。あと、聞き手の事を考えていない話し方は、貴族としては、後悔する日が来るのでは？」

セシリア・オルコットは”聞き手”の事を考えないらしい、いや、本当はわずらわしいのでそう切り返してみる。

すると、誰もが見ても顔が果物の熟すように徐々に徐々に真っ赤になって行くのが分かる。

「ふん……専用機も持っていない貴方に、何が分かるとおっしゃるんです？」

「努力はさぞかし大変だったのでしょうが、それを乗り越えたのは立派と思います。

……しかし、それを驕る（威張る）様なら、ただの自信過剰です」

沈黙が教室を支配する。その言葉には、何があったのだろうかは分からない。

だが、部活見学へ向かおうとしている生徒も、足を止め、対話（言い合い）を固唾を呑んで見守っていた。

――別に、どうでもいい事だと思うけど。

「な、な、何を……」

セシリア・オルコットの顔は、果物の熟れた熟れないを越して、

もう金属が溶ける位なんじゃないかと言うほどになっていた。
そして、追撃を開始する。
「そもそも専用機を持っているからと、付け上がりすぎなんですよ、貴方は。第一、貴方の変わりはいくらでも存在するんですよ。それこそ、星の数ほどはいなくても、それなりには」
「専用機持ちは偉いと言うのは間違いです。まあ、貴族は偉いと思っているかもしれませんが、学園では関係ありません。ただの生徒で……あれ？」
そう言っている途中でふと気が付く。何にと言われると、時刻に。
「あ…部活動の見学があるので、失礼します。言いたいことがあるなら明日にでも」
そう言って、今日はこれ以上面倒な事に巻き込まれないため、そそくさと教室を後にして、部活動見学へ向かう。
最初に第７アリーナへ向かい、ソフトボール部の見学をする。第７アリーナは、世間一般で言う”体育館”なのだが、広さは２００ｍ×２００ｍの４００００？で、室内の部活動がすべての面積をフル活用している。
なんというか、これが血税で作られたのかと思うとなんだか複雑だ。もちろん、こんな施設を使わせてくれるのはありがたいが、その為だけに大人が苦労する、と言うのも複雑な気分になるだろう。
「あれ、影島さん？」
第７アリーナについて突然、誰かが後ろから声を掛けてきた。

私は、誰なのかを確認するために、後ろを向いた。

甲の壱：第四話（後書き）

はてさて、声を掛けてきたのは一体誰だったのでしょうか。

……ご想像にお任せします。と言いつつ、次回ちゃんと出します。

誤字、脱字、描写などの修正点や意見がありましたら、

感想欄にお願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4830t/

一人のモブの些細な現実

2011年11月15日23時35分発行